

連載企画—音の博物館—

日本科学未来館*

網野加苗 (科学警察研究所/日本学術振興会)**

日本科学未来館 (以下、未来館) は「科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について考え、語り合うための、すべての人々にひらかれた場」という理念のもと、2001年に設立された。館長はご存知のとおり、宇宙飛行士の毛利衛氏である。大きな船を思わせる外観の建物 (図-1) は、お台場の国際研究交流大学村の一角に位置している。常設展示は四つのテーマに基づいており、すべての展示物が第一線で活躍する科学者・技術者たちによって監修されている。

音や聞こえに関する展示も幾つかある。5階の「生命の科学と人間」の展示フロアでは、マガーク効果や遅延聴覚フィードバック、音素修復などの“脳の混乱”を疑似体験できる。3階の「技術革新と未来」では、人との共生を目指す ASIMO [1] や人への癒しを目的とするセラピー用ロボットのパロ [2]、災害時に活躍するレスキューロボットなどのデモが行われている。ヒューマンインタフェース技術 iRT を搭載したインタロボットでは、音声入力に基づいて身振り手振りの動作を自動生成する様子を体験することができる [3, 4]。同じく3階の「情報科学技術と社会」のフロアには、音を使ったデジタルメディア作品、スモールフィッシュがある。長方形の白い床に2匹の黄色い魚が元気に泳ぐ。魚はそれぞれフルートとドラムの音色を持っており、色彩にぶつかると反射して楽器の音を奏でる。複数の色と魚をうまく構成することで、音楽を作ることも可能だ。

未来館では、常設展示以外にも様々な「科学と人との出会いの場」が提供されている。ボランティアによる研究棟ツアーでは、未来館のもう一つの顔である研究開発施設を見学することができ、研



図-1 建物外観 (写真は日本科学未来館提供)

究者に直接質問をすることもできる。それ以外にも、実験教室やデモ実演、ワークショップにサイエンスカフェ。科学コミュニケータの研修プログラムも用意されている。

形を変えながらいろいろなことに挑戦し続ける未来館。昨年10月には来館者数600万人を突破した。あなたも未来館で新しい出会いを体験してみませんか。(日本科学未来館ホームページ <http://www.miraikan.jst.go.jp/>)

文 献

- [1] HONDA ASIMO オフィシャルサイト <http://www.honda.co.jp/ASIMO/>
- [2] 株式会社知能システム パロオフィシャルサイト <http://paro.jp/>
- [3] インタロボット株式会社 <http://www.i-robot.co.jp/>
- [4] 渡辺富夫, “身体的コミュニケーションにおける引き込みと身体性—心が通う身体的コミュニケーションシステム E-COSMIC の開発を通して—,” ベビーサイエンス, 2, 4-12 (2003).

* Miraikan, National Museum of Emerging Science and Innovation.

** Kanae Amino (National Research Institute of Police Science/JSPS Research Fellow (PD), Kashiwa, 277-0882) e-mail: c0672001@sophia.jp